

日本細菌学会 関東支部ニュース

第14号

第65回日本細菌学会関東支部総会の開催にあたって

総会長 河野 恵
(東京薬科大学教授)

本学会は昭和2年第1回衛生学微生物学寄生虫学連合会(会長北里柴三郎)として始まり、連合微生物学会を経て、戦後(昭和21年)日本細菌学会の名称となった伝統ある学会で、中でも関東支部はその過半数の会員を有する最大支部である。関東支部の主要行事の一つとして年2回春秋の学会(支部総会)の開催がある。春の支部総会は特別講演・シンポジウムを、秋の支部総会は一般講演をというものがほぼ定着した支部総会の持ち方になっていた。前総会(秋)長の帝京大学 山口英世教授は第一線で活躍する若手研究者を中心に、細菌学の各領域を網羅した内容のポスター・シンポジウムと特別講演2題という斬新な総会運営をされ好評でした。この後をうけた支部総会長となりますが、時あたかも支部総会の活性化の声とともに、一般演題の募集と会期2日間の方向での予算措置もとられました。まことに気の引き締まる思いを致しております。とにかく、前向きにいろいろと検討した結果、最終的に第65回支部総会〔6月12・13日(水・木)〕は、2つのシンポジウム「PCR法はどこまで応用できるか」、「微生物とバイオサイエンス/バイオテクノロジー」とポスター形式による一般講演および特別講演1題という内容になりました。

自然科学の発展はしばしば実験技術の発展と無関係ではありません。遺伝子増幅が容易にできるPCR法はいろいろな分野の研究に有力な実験技術として使われるようになってきました。そこで、第一の柱として上記テーマ



でのシンポジウムを企画し、東大・医科研の吉川昌之介教授に演者ならびに全体の構成を決めていただきました。細菌、ウイルスはもとより法医学、考古学といった領域までその概論から細部の技術へと配慮されているので、ほぼPCR法の最新情報が得られるものと思います。このシンポジウムの中程で「環境モニタリングへのPCR法の応用」ということで特別講演を米・Louisville大学生物学教授R.M. Atlasにお願いしました。ご期待下さい。

病原細菌学の研究は本学会の中心テーマではありますが、境界領域ともいべき他の微生物関連科学との交流もまた新たな視野にたつての研究という立場から有意義なことであろうと思います。そこで、第二の柱としてSIヌクレアーゼの発見者元理化学研究所安藤忠彦教授(日大農獣医学部)とご相談し、上記テーマでのシンポジウムを企画・構成しました。内容は「極限微生物について」東工大工学部堀越弘毅教授、「好熱菌に学ぶ酵素耐熱化の戦略」東工大理学部大島泰郎教授、「磁

性細菌とその応用」東京農工大工学部松永是教授、「バイオプラスチックの微生物合成」東工大工学部土肥義治助教授、「酵母の塩基配列特異的エンドヌクレアーゼの生化学と分子生物学」理化学研究所柴田武彦バイオデザイン研究グループ長ということで、それぞれが特別講演といった内容ですが、一応シンポジウムという形式をとらせていただきました。

一般演題についてはどれだけ集まるか大変心配でした。しかし、お陰様で順調に申し込みがあり、逆に先輩・同僚諸先生への演題提出のお願いは一部を除いて見合わせざるを得なくなりました。この場を借りてお礼とお詫びを申し上げます。全部で一般演題は28題、これを会期両日午前中に行う予定です。発表はすべてポスター掲示により、討論時間を含めて一題10分としました。会場となります野口記念会館はすでに当関東支部総会には馴染

みの会場です。昨年内部の改装が行われ、一階の部屋の一部がポスター掲示による催し行事に使用できるようになりました。ポスター会場での講演ならびに討論の様子をテレビモニターを使用して、他の会場に映写し、そこでもポスター会場と同じく見ることができ、また、討論に参加することができるようにしようと計画しております。

学会開催に際してのもう一つの行事である懇親会についてですが、いろいろな都合で2日目の最後に催すことになりました。2日間の勉強の疲れを癒し、学問交流の場としてできるだけ多くの方々が懇親会にも出席賜りますようお願いいたします。来る、第65回日本細菌学会関東支部総会6月12・13日野口記念会館でお会いできますことを祈念し、楽しみにしております。

改訂された日本細菌学会関東支部会則

- | | | |
|--------------------|-------|------|
| 1. 本支部は日本細菌学会関東支部と | 〔名称〕 | 変更なし |
| 2. 本支部は主として関東地区に在住 | 〔組織〕 | 変更なし |
| 3. 本支部は日本細菌学会本部との | 〔目的〕 | 変更なし |
| 4. 上記の目的を達するために次の | 〔事業〕 | 変更なし |
| 5. 本支部の事務所は支部長の所属 | 〔事務所〕 | 変更なし |
| 6. 本支部に次の役員を置く。 | | |

支部長1名、評議員21名以内、幹事若干名。

評議員は14名は公選とし、支部長は評議員が選挙する。選挙規則は別項にかかげる。必要あれば支部長は別に評議員として7名以内を推薦し、評議員会がこれを決定することができる。支部長は支部の業務を運営するほか、日本細菌学会支部長会議を通じて本部との連絡にあたる。

評議員は会務一般を評議する。幹事は支部長が会員中よりこれを委嘱し、本支部の庶務会計等の事務にあたらせる。

役員の任期は3ヶ年とし、重任を妨げない。但し、評議員については連続3期以上にわたることはできない。欠員を生じた場合は、支部長は評議員会にはかり、これを補充することができる。その任期は残任期間とする。

- | | | |
|---------------------|-------------|------|
| 7. 評議員会は支部長がこれを招集す | 〔評議員会の開催〕 | 変更なし |
| 8. 秋季の支部総会において支部長は | 〔支部長の会務報告〕 | 変更なし |
| 9. 春秋2回の支部総会を主催するた | 〔支部総会長の決定〕 | 変更なし |
| 10. 入会には支部長の承認を得、また | 〔入会手続き〕 | 変更なし |
| 11. 本支部の経費は会費、寄付金その | 〔会費・支部会計など〕 | 変更なし |
| 12. 本会則は秋季の支部総会において | 〔会則の変更〕 | 変更なし |

「選挙細則」(昭和57年10月2日改訂)

次期評議員の選挙を行うには、支部長は会員中より5名の委員を委嘱し、選挙管理委員会をもうけ、有権者名簿の作成、選挙期間の決定および選挙を実施する。

評議員の選挙は単記無記名投票で行い、有効得票数の多いものから14名を当選者とする。但し、同一機関から2名以上を当選者とすることはできない。得票数が同じで当選者を決定できない場合は籤による。

選挙権者は選挙施行の年の前年の12月末日以前に本支部会員になったもの、また被選挙権者は選挙施行の年の6年前の12月末日以前より引き続き本支部会員であったものとする。

支部長の選挙は評議員の3分の2以上の投票により、会員中より選び、過半数の得票をもって当選とする。得票が過半数に達しない時は、最も多い得票数2名で決戦投票を行う。もし、得票数が等しいときは籤で定める。

「付則」 本会則は昭和50年11月11日よりこれを実施する。

平成2年11月14日改訂

平成3年10月1日より実施

平成4 - 6年期日本細菌学会関東支部評議員選挙を迎えて

選挙管理委員会委員長 五十嵐 英 夫

本年は平成4 - 6年期日本細菌学会関東支部評議員選挙の年です。平成3年1月22日に開催された第9回評議委員会において、次期関東支部評議員選挙のための選挙管理委員会が設置され、私たちが(五十嵐英夫、池田達夫、岡村登、笹川千尋、島村忠勝)委員として任命されました。宜しく願い申し上げます。

これまでの関東支部ニュース誌に掲載されておりますように、徳永 徹 支部長のもとに現評議委員会では、関東支部の活性化について活発に論議が行われてきました。関東支部活性化の第一の方法としては、支部総会の活性化にあるとの結論が出されました。現評議委員会のもとで開催されたこれまでの支部総会は、各総会長の個性と御努力によって大変有意義な会になっており、活性化の方向に向かっていられると思われまふ。第二の方法としては、支部評議員数や選出方法に問題があるのではないかと結論が出されました。そのため、評議委員会では、評議員数や選出方法について大いに議論され、一つの方向が決

まりました。そして、関東支部評議員会から「日本細菌学会関東支部会則」の改訂案が第64回日本細菌学会関東支部総会の会務総会(平成2年11月14日)に提出され、審議された結果、満場一致で可決されました。改訂後の「日本細菌学会関東支部会則」及び「選挙細則」については、日本細菌学会関東支部ニュース、第14号に掲載されております。また、今後の選挙管理委員会の活動予定は、「関東支部評議員選挙に関するお知らせ」として日本細菌学会誌: Vol. 46, No. 2に掲載されておりますので、是非ご覧下さいますようお願い申し上げます。

以上の様に、今回は、徳永 徹 支部長のもとに現評議委員会で、関東支部活性化のために検討してきた改訂後の新しい「日本細菌学会関東支部会則」及び「選挙細則」のもとの最初の選挙です。会員の皆様、皆様の一票は関東支部の活性化のため、また細菌学の発展のための貴重な一票です。どうぞ棄権のないようお願い申し上げます。

『日本細菌学会役員選挙細則の 検討を望む』

帝京大学医学部細菌学
木村貞夫

一般の会員の皆さんにはあまり関心がないことと思うが、現在の日本細菌学会の役員選挙細則には、いくつかの不合理な点や、関東支部の会員にはかなり不利であると思われるものがあるのであえてこの一文を書く次第である。

現在の役員選挙細則は、昭和47年5月に仙台で開催された第45回総会で会則変更と共に定められたものである（日本細菌学会雑誌、27巻、2号、376-383、1972）。

詳細は省くが、役員に関する事項のみを記すと、従来の推薦による評議員を廃止し選挙によって選出することにして定員を100名に減らしたこと、理事は支部別、専門分野別を考慮して評議員の互選により選出することにしたことが大きな変更点である。

これらのことについて、いろいろ書きたいことはあるが、紙面の都合上今回は二つの点だけを挙げて会員諸子のご批判を迎ぎたい。

1. 評議員選挙について

これについては選挙細則で、当該支部の被選挙人のなかから2名連記、支部を考慮することなく1名を選ぶことになっている。支部別の評議員の選出にどうして2名連記になったのか、その経緯は知らないがこの結果下記のような奇妙な現象が生じている。毎回行われた評議員選挙の結果は、学会誌に掲載されるがこれによると、評議員当選に必要な最低票数は、支部によっては8～9票の所がある。

皆さんご承知のように、関東支部では支部評議員も選挙で選ばれるが、その当選に必要な最低票数は10票である。このことは地方選挙に当選する事の方が難しいことを意味している。たとえば悪いが、市会議員に当選することの方が、国会議員に当選するより難し

いという現象が生ずる。この理由の一つは支部評議員は単記であり、本部評議員は2名連記であることにもよると思われる。なぜ2名連記なのか是非再検討を委員会で検討されることを望むものである。

2. 理事選挙について

これについては選挙細則で、13名連記で各支部毎に1名（但し関東支部は2名）を選ぶことになっている。一般の会員の方の中にはこの規則をご存じない方も多いと思うが、評議員になられた方は知っておられる筈である。しかしあまりおかしいと感じられていないのではなかろうか。この規則によると、関東支部には評議員が50名いて選べる理事は2名である。一方支部によっては2～3名の評議員で1名の理事を選ぶ所がある。いってみれば関東支部選出の評議員の理事選出における1票の価値は極めて低いものであるといわざるをえない。この理由は13名連記、各支部毎に1名という規則にあると思われる。

以上現在の役員選挙規則についての疑問点を挙げたが、紙数の関係でわかりにくい点もあろうかと思うがお許し願いたい。いずれにしろ、制定されて20年近くなるものであるから、是非組織検討委員会あたりで再検討されてはどうかと思うものである。

最後に誤解のないように申し添えるが、この一文は現在の理事会に対してイチャモンをつける気持ちは毛頭ないものであり、あくまで規則の改訂を検討されることをお願いするのが趣旨である。

『国外会員について』

サウスフロリダ大学
山本 容 正

海外で研究生活を続けていて、日本の学会、特に細菌学会に関連して近年感じた事柄に、外国へ留学なさる方々が必ずしも国外会員の制度を利用されていないのではと思われるこ

とが、私の身近で幾つか最近経験しました。

海外で研究活動を続けている場合、当該国の国内学会や国際学会ばかりではなく、当然のことながら、日本での研究動向にも大きな関心があります。多くの海外留学の場合、日本で研究歴をながしか積んだ後に（大学院時代の研究も含め）外国へ渡る場合が大多数と思われませんが、本人が日本不在の時にその方面の研究が日本でどのように進展していくのかは興味ある所ですし、また、外国で実際にたずさわっている研究が日本ではどのように行われているかを比較することも同様です。このように留学は外から日本の研究を見ることが出来る数少ない貴重な体験と思われまます。このような観点から、細菌学会に関して言えば、海外留学時に国外会員への変更を行って、細菌学会誌を留学先へ送っていただくことは、上記情報を手に入れる点において、まさに好都合であります。私自身、毎回送られてくる細菌誌を、特に総会号での演題要旨集を、日本からの重要な情報源として活用しております。近年、種々の情報が容易に海外に在っても手に入るようになったとは言え、ほとんどの海外大学図書館では、日本の細菌誌は購入されておらず、このような情報を手に入れるには、個人的に会員資格を維持し、かつ国外会員への変更で行うしかありません。実際に、容易にこれら情報と接することができます。この制度は、これから外国へ留学を予定されておられる方に是非お勧めするしだいで。

「隠されていた才能」に出会った事例」

(株)総合防菌研究所

小林 真次

筆者の研究室でのこと。一人の娘さん（高校卒業後に事務系の仕事に従事）に実験アシスタントになってもらうため、トレーニングを始めることになりました。トレーニングを開始するにあたって、ロートルの技術顧問から（昔の映画の大船調で）「嫁入り前の娘さんなのだから、何かあっちゃいけませんよ」と念をおされて、どうやって細菌の取り扱いを教えたものかと、その責任の重さに頭を痛め

ました。そこで考えついたのは、ヨーグルトを作る乳酸菌を材料にすることでした。某社の粉末状の“ヨーグルトの種”をSCDプロスで振とう培養し、それをBCP加平板に塗抹して得られる乳酸菌コロニーを用いて、コロニーの形態観察や釣菌、培地への接種等々の一連のテクニックを教えました。ところが驚いたことに、彼女は何から何まで初めてにもかかわらず、実に器用に筆者などよりも上手にこなしたのでした。それじゃとばかりに、次にグラム染色をやってもらったところ、これまた実に見事な標本を作成しました（実験台上にあった筆者の作成した標本などより数段のできればえ！参った！）。彼女は今でも虫を採集したり溪流釣りをしたりと、野性味に満ちたお茶目な娘さんですが、彼女の例に接して筆者は、世の中には“隠れている才能”があることを痛感させられました。ところで、この“ヨーグルトの種”を用いての実習、自家製ヨーグルトのおまけもあって、スタッフ一同の評判も上々です（しかしピーカーで作ると、皆なぜか初めは警戒する！）。ちなみに彼女は現在、自分の皮膚から採集した常在細菌をいじくることに熱中しています。そう遠くない日に、細菌学会の総会に参加するのを楽しみに、毎日頑張っている彼女です。

『真冬の蚊』

東京歯科大学微生物学

奥田 克爾

大学の研究・教育施設のほとんどが水道橋から千葉の埋め立て地に引っ越して10年目になろうとしている。引っ越した当初は、埋め立て地のキャンパスに本当の自然がなかった。今は春のひばり、夏の蝉、秋の虫がにぎやかで水道橋にはない四季を感じる。

都心に四季がないと感じたのは、水道橋校舎の真冬の蚊である。特に地下の研究室は、彼らの容赦ない攻撃にあった。この体験をクリスマスカードに書いて米国の友人に送った。彼はその内容がよくわからずわざわざ小生に問いあわせてきた。それ以来、英文では下手に季節の挨拶文などを書かないことにしてい

る。ましてや真冬の蚊のことなど小生の英語能力からして難しいことであった。

1987年に白水社から、ロビン・ギル著で出された「誤訳天国」—ことばの play と misplay—という本を読み、言葉はその使う人々の文化そのものであることを痛感している。その本のまえがきを一部紹介しよう。

南アメリカのアンデス山中に住むケチュア族は、一風変わった時間的感覚を持っている。それはわれわれにとって、まさに魔訶不思議なものなのだ。なにしろケチュア語では、未来は「前方」にあるのではなく「後方」にあり、過去も「後方」にではなく「前方」にあるというのだから。

彼らはこう説明する。予言者でないかぎり未来は見えない。見えないということは視野から外れているものであり、つまり「後ろ」に潜んでいる。いっぽう過去のことは、あたかも目の前のものを見るようで誰れでも思い出すことができる。つまり「先」にあるというわけだ。

さて、全ての研究者は priority を強調する。この姿勢を小生も変えるつもりは毛頭ない。50歳を目前にすると後ろに潜んでいることをもう少し見極めることが大切になってきたように思う。先のある教室の研究員に細かな指示よりも的を射たアドバイスが出来なければ「真冬の蚊」のはなしで混乱させるようになってしまいうだろう。

集 会 案 内

●日本ビフィズス菌センター学術集会

主催：日本ビフィズス菌センター

会期：1991年6月8日

場所：東京医科歯科大学

内容：ビフィズス菌をはじめとする消化管内細菌叢に関する学術集会

問い合わせ先：日本ビフィズス菌センター

〒113 東京都文京区弥生2-4-16 学会センタービル内

TEL 03-3817-5806 FAX 03-3817-5800

●第7回「細菌の病原性とその分子遺伝学」研究会

日 時：1991年7月5日(金), 13:00~18:00

場 所：北里研究所(港区白金5-9-1)

世話人：榎原 宏文(北里研究所・細菌部)

主 題：病原遺伝子の発現とその調節

講師および仮題：

1. 中田 篤男(大阪大学微生物病研究所) —ネズミチフス菌の二成分制御系
2. 松井 英則(北里研究所) —サルモネラのプラスミド性菌血症惹起能遺伝子
3. 古賀敏比古(国立予防衛生研究所) —齧蝕細菌の定着遺伝子
4. 牧野 壮一(国立公衆衛生院) —淋菌の抗原変異と宿主との相互関係
5. 渡辺 治雄(国立予防衛生研究所) —赤痢菌(S. sonnei)の病原遺伝子
6. 戸辺 亨(東京大学医学研究所) —赤痢菌(S. flexneri)の病原遺伝子
7. 水野 猛(名古屋大学農学部) —大腸菌のオスモティックショック

連絡先：松井 英則 TEL 03-3444-6161(2131)

●第20回薬剤耐性菌シンポジウム

日 時：平成3年8月27日(火)正午~29日(木)正午

場 所：伊香保温泉「観山荘」

特別講演：2名交渉中

今回プログラムは全てシンポジウム形式で企画し、内容は以下の通り。

1. 疫学：赤痢菌，黄色ブドウ球菌，緑膿菌他を中心に検査室，基礎，臨床各立場から。
2. 耐性機序：遺伝（Tn, conjugal Tn等）及び生化学（PBP, DNA gyrase, 膜透過等）を中心とする内容。
3. 作用機序：薬剤の作用機序，薬の使い方，新薬の開発の方向等。

以上，討論を中心に行う予定。尚，一般演題も追加発言の形で公募いたします。多数の方々の演題申込みを期待しております。演題申込みと引換えに抄録原稿用紙をお送りいたします。

* 抄録原稿締切日：平成2年7月15日

尚，会員（年会費2,000円）の方には第20回参加案内と抄録をお送りします。未登録の方は事務局まで御連絡ください。

世話人代表：橋本 一（群馬大医・微生物教授）

事務局：〒371 前橋市昭和町三丁目39-22

群馬大学医学部薬剤耐性菌実験施設

TEL 0272-31-7221（内線2584）井上，大久保

●ミニニュース●

- 斉藤和久先生（国際医学情報センター理事長，慶応義塾大学名誉教授）に第26回（1990年度）小島三郎記念文化賞が贈られました。対象となった業績は「クローン化T細胞を用いた免疫機構の解析」です。
- 工藤泰雄先生（東京都立衛生研究所・微生物部細菌第一研究科長）に平成2年度の大山健康財団激励賞が贈られました。対象となった業績は「開発途上国からの研修生に対する，永年にわたる腸管系病原菌の分離・同定に関する技術指導」です。

議 事 録

●第8回評議員会

日時：平成2年11月14日（水）13時～14時

場所：アルカディア市ヶ谷

出席者：五十嵐英夫，池田達夫，岡村 登，金森政人，河野 恵，北野繁雄，笹川千尋，島村忠勝，高橋昌巳，鶴 純明，三上 巖，山口英世（第64回支部総会長），中野昌康（第66回支部総会長），徳永 徹（支部長），島田俊雄，中村明子（幹事）

欠席者：新井俊彦，川上正也，久恒和仁，

光岡知足。

議題：

1. 第64回支部総会会務報告の件

第64回支部総会に先立って，徳永支部長より会務報告の内容および支部会則の改訂について説明がなされた（別紙）。

2. 第65回支部総会準備状況報告

河野（東薬大）支部総会長より準備状況について説明がなされた。

開催日：平成3年6月12日（水），13日（木）

場所：野口記念会館

内容：シンポジウム2題を予定している。

(1)吉川教授（東大医科研）の司会で「PCRの実際への応用」，(2)安藤教授（日大農獣医）の司会で「微生物とバイオテクノロジー」。両方とも教育シンポジウム的な内容となる。

一般演題を募集する（平成3年2月19日抄録原稿締切）。

なお，懇親会は2日目終了後を予定している。

3. 第66回支部総会準備状況報告

中野（自治医大）支部総会長より準備状況について説明がなされた。

開催日：平成3年11月7日（木），8日（金）

場所：自治医科大学医学研修センター

内容：特別講演は「宿主と寄生体」テンブル大学アイゼンシュタイン教授を予定している。その他1題を予定している。従来どうり一般演題を募集するが，シンポジウムの企画は未定である。

懇親会は1日目の終了後に行う予定。

4. その他

第7回評議員会議事録の確認。

●第9回評議員会

日時：平成3年1月22日(火), 14時～17時

場所：国立予防衛生研究所第一会議室

出席者：五十嵐英夫, 新井俊彦, 池田達夫, 岡村 登, 金森政人, 川上正也, 河野 恵, 北野繁雄, 笹川千尋, 島村忠勝, 高橋昌巳, 鶴 純明, 久恒和仁, 中野昌康(第66回支部総会長), 徳永 徹(支部長), 島田俊雄, 中村明子(幹事)

欠席者：三上 稟, 光岡知足

議題：

1. 第65回支部総会準備状況報告

河野(東薬大)支部総会長より準備状況について説明がなされた。

開催日：平成3年6月12日(水), 13日(木)

会場：野口英世記念館

内容：シンポジウム(I) 遺伝子増幅PCR法はどこまで応用できるか。オーガナイザー；吉川昌之介(東大・医科研)教授。シンポジウム(II) 微生物とバイオサイエンス/バイオテクノロジー。オーガナイザー；安藤忠彦(日大・農獣医)教授。

今回の春の支部総会は一般演題を募集する(演題申込締切は2月20日(金))。

2. 第66回支部総会準備状況報告

中野(自治医大)支部総会長より準備状況について説明がなされた。

開催日：平成3年11月7日(木), 8日(金)

会場：自治医科大学地域医療情報研修センター A会場(大講堂, 850名), B会場(中講堂, 300名)

内容：特別講演1. T. K. Eisenstein (テンブル大) 教授, Host-defence mechanisms against bacterial infection. 特別講演2. 松島綱治(金沢大・がん研薬理部) 教授。サイトカイン(仮題)を予定している。

一般演題はすべて口答発表とし, 1題12分(含討論時間)の予定である。

参加費等は前年度に準じて行う。

懇親会は11月7日(木)午後7時より, 小山

グランドホテルを予定している。なお, 宿泊は小山グランドホテルを確保している。参加者が直接当ホテルへ9月末頃までに予約をしてほしいが, 一杯となった場合には学会事務局(自治医大・微生物学講座)へ連絡をすれば, 別のホテルを紹介する。

3. 第67回および第68回支部総会長選出の件
出席した全評議員による選挙の結果, 第67回および第68回総会長候補者として島村忠勝(昭大・医)教授および金ヶ崎士郎(東大・医科研)教授が決定した。なお, 交渉は徳永支部長が当る。

4. 次期支部評議員, 選挙管理委員選出の件
出席した全評議員の推薦により, 五十嵐英夫(委員長), 池田達夫, 岡村 登, 笹川千尋, 島村忠勝の各評議員が選挙管理委員に選出された。

5. 支部ニュース小委員会報告

支部ニュース14号は4月末日発送予定。原稿締切は3月15日となる。内容は第65回河野総会長の挨拶。支部会則改訂および選挙細則改訂の要旨をのせる。その他フォーラム欄・ミニニュース等。

6. その他

1) 第8回評議員会議事録の確認

◇編集後記◇

今回初めて一般会員からの投稿を頂きました。今までの投稿はほとんどは依託原稿でしたが, 小林先生の原稿は自主的な投稿によるものです。編集子として涙がでるほどうれしい投稿でした。今後も一般会員の皆様の自主的な投稿を期待しております。(T. I.)

日本細菌学会 関東支部ニュース 第14号 (1991. 4. 15)

発行：日本細菌学会関東支部
〒141 東京都品川区上大崎2-10-35
国立予防衛生研究所
☎ 03-444-2181
